



本草綱目

下





下巻目録

| | |
|------|-------|
| 紫陽花や | 本の下り |
| 栞香や | 八九四 |
| き豆乃 | 友のあや |
| 秋立や | 仰明社 |
| ふり賣の | 猪藪や |
| いさゝき | 新麦ハ |
| 惟子ハ | 十三夜 |
| あ仙ハ | 香より |
| 言のねえ | そのかゝら |
| 提子 | 引おほ |
| 野ハ音り | 風流の |
| 藤のあ | 五人杖歌 |
| 朝鳥や | 管根歌 |
| 夕や | 傘 |
| 芹鏡や | 早く咲き |
| 水鏡や | 其日か |
| 初葺や | お寄 |



牛流し
若くし
能くし
十六首ハ
此より
阿比
いらく
秋ちく
牛流し
やん
は
志

右分仙

ぬきて
ねん
旅人
旅病
江戸橋
野
本
文月
砂
右五十首
右十二句
生
名月
みな
月
星
砂

空
此
杖
水
白

右半分仙

志
松
鏡
金
能
休
涼
茶
芽
世
さ

右表斗

是より

才三すくの部 三十

昭の部 三十六

附白斗の部 三十七

紫陽花や菫を小庭の別墅

よき雨あひは 伴方茶依

朝日は朝の子童の姿みせて

出づる露のお手拭お記く

かんくと有内室をまわらう

楳嶺うまきくまきと又茶家

何處も何處とくぬ破きち

まじくくと鳴る浪風乃る

あき堂より織肌をそへ後捲

ちいさな鳥乃身寄るまき

高をゆくりと内の御里

山のふちろり下市乃里

るよ斗の信いきはれおの

四日乃月更すくく西より

秋あけても 畑の土代を

雲雀のよみゆ乃をえ掛さる

あつくと足の手もさる茶盛

おしと山より雲く川

てんてん

子珊

杉風

桃隣

八葉

菫

珮

珮

棠

道

珮

凡

障

葉

菫

珮

風

五月乃来り飛治の人やい
傷く秋徳をこくはの事
是れ酒癖くく碎のちる
又つたるを傳へ 廿五
叶陽の利上をうま運
ちんはく今物ハ鞠を系
結構な者をけよ切入
見せしるをくく赤いつ
五分くくくくくくく
ちんはく今物ハ鞠を系
紫栗の舞をうま運
國うまをくくくく
第一くくくくくく
糞汲みけいひ儲けく
今の片をくくくく
日用乃くくを舞く
扈後流くくを舞く
小舟を思ひ池乃山子

藤 紫 菫 珊 菫 葉 藤 風 珊 菫 葉 藤 子

本けしつり結を伝くく
西日長軍よりくく
旅人の風をきりて
ときを思ふをくく
月夜く夜の心裏に
鞆通る之系物ハ秋
名をくくくくく
へはは旅人の浦乃
中をくくくくく
以てをくくくく
くくくくくく
物くくくくく
月くくくく
秋風乃をくく
居くくくく
子秋夜の盛く
巡視死める

藤 紫 菫 珊 菫 葉 藤 風 珊 菫 葉 藤 子

何よりも蝶の現えおをりなり
み出ふとの力さへ なる年
羅り目をいささしくしり
然望みんくまんと位りひき
手本より紀乃罪者う顔り
酒くをけりあふさるるらん
双六乃目をのそくをきり
假乃格佛よむりよ念解
中くよ土間よ直心奉る
遠名を里れたを重もの之
將まきりし舞躍り形を奏
月夜くよ月満る月
花蔭あやうまほけはく
唯四方あり草菴れ露
一貫乃跡むつくと思ひ
醫士の華々致ぬ分別
世嘆くを命のあやをち
忙りきり舞る乃山中

五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五

色名

梅のあまの月と日の物山河家
霞くよ維子れ啼く月野坡
家普信と春の子透る花付
上れあまの月ありる葉の直
宵の内はくよとさく月のそ
寂寂とねと秋の憐れ
山影の影ありて暈然
娘を望みんくまんと位り
手本より紀乃罪者う顔り
酒くをけりあふさるるらん
双六乃目をのそくをきり
假乃格佛よむりよ念解
中くよ土間よ直心奉る
遠名を里れたを重もの之
將まきりし舞躍り形を奏
月夜くよ月満る月
花蔭あやうまほけはく
唯四方あり草菴れ露
一貫乃跡むつくと思ひ
醫士の華々致ぬ分別
世嘆くを命のあやをち
忙りきり舞る乃山中

五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五

石窟な藤の中のリもあやう
そりち坊をよとつあうしに
泣るゆひううあま一はちき
垂りて流るるあひをさる
鬼の住くをて藤をほらふ
家を渡うく 控り 娼者
今更に雲の層をよきとて
のすくぬんくしほあはる
鳥や又祖父のふ髪の日をよ
塩悪るぬセ夕乃思
名月のまに合きこき草畑
まぐくしりてあふあ糸
けけと霜の團まうき花
山の根際乃降くたうこ
よこやうよく 風の吹あを
晒のくくしりて 雀 啼く
さえよと女子とうく連きて
余乃岬乃くま董たふ

あ 意 牛 屋 あり 牛 を 三 牛 水 意 至 あり 牛 石 意 牛 あり

お半岩

芭蕉

夏のおやあはれはくはくし
赤ハちりまると蓮乃極先曲
雪あいつその極よまを
古夢 草 菟よ反故也 唯
月影の雪とちりり雪の交
雪くく氷と 分り雪あふ
杖と 物湯の糸へ追あう
山くくろくはときてあは
飯櫃から西備まをき公野
きくくユ文をきく 照 障
おひりるあは後を 橋けあ
おひ乃りあふ夕日あは
平野又草を有年一たぐは
秋思りる門八居思る
るくくあひまひ月の新
尾流くつてくくあは若く
候好のこくはあはあはく
正月その 襟まきさく

あ 意 牛 屋 あり 牛 を 三 牛 水 意 至 あり 牛 石 意 牛 あり

美風は普庵の法多しとたて
 菽り村くぬきありうりり
 喰ひ子ぬ舞も 罌もさうり
 何その射と山 伏する所
 毎つとを樽よけしるささる
 藤こはちる 卯月野々末
 お病やしぬえよ 前さ本所
 隊の日射の雪乃し身を
 君ころり身をさぬ酒の味
 是より乃ちとあつた歌
 射射— 文射来る舟の音
 そらう— あつて— 壺の上霧
 虫落つる 四葉の角れ河原所
 言遊をあつる 表 一園
 今れアな法を忍びす橋の上
 大キと鐘乃らんよまゆり
 盛なるおまも 鹿耳— ともて
 腰かけつ— 岩柏の下
 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

及肩

殊きく早仇 幸さるる丸
 敷居中へくく 戸をさし月
 早船をさとする 佐道二用は
 人をよりする 過りあり師
 昭柳— 清くく 名も甲舎孫
 舟行つたわら— 山原の足
 春挽く舟のこけく 捨り人
 ちと福路の橋— たん福を
 居形— 不難飲射のたるる
 露あらし 娘かきゆき
 掛く壺合瓶のちたり先
 肌きくとつ— 貴 娘は
 月射あ酒— 母活あさう—
 日赤りむき— 雲の朝吹
 ちりくと振板ぬき— 花書
 荷ひ運つる 赤乃入州
 幅原の 妙川 酒も長閑さよ
 抱織採ゆ 傳へあり— たり
 肩 志 及 房 志 及 房 乃 取 志 正 秀 昌 房 之 道 珍 頑

陽の下のり一紐歩連て
 日さすはゆり足腕の縁
 見る斗に上るるる寂佛
 湖水を飲する細きさくは
 原象ハお輝るる勢田の真
 花のたのつ〜のつ〜松明
 むささきと大鼓鳴る月るる
 必妹を惜しむ庭の乱菊
 唐菓や勅の子守を子仕能
 公千〜の如煙を解之
 お細よ男世帯の寺舞好
 たもろ〜ことと信茶車よ
 市振の園〜西ハ能也の
 浄海院止〜きけりよま
 風まちよ斤系何と吹ま
 ちふ辛也〜と饒をわんけ
 後う花そ白墨作り花のま
 は〜〜え〜〜と世帯成ふ

秀 考 紅 志 房 肩 意 紅 考 秀 考 意 房 考 意 房 考 意 房

巻意

振賣の房あまのくまひを情
 降りしやま〜時多ある彩
 書通う櫻の小舞を引〜
 斤と市山〜り月と見る旅
 好物乃佳と送さぬ秋の風
 刺来れあふ玉乃秀高
 細の若を〜つ〜あま〜ひ〜
 望さ〜ん〜え〜は二十八日
 い〜〜さ〜い〜は〜軍の〜ゆ〜
 法書代書〜雜使も〜せぬ
 明志〜し〜親批灯と吹清〜
 肩痛〜さる湯屋乃膏茶
 上玉の千系刻印も〜ハの〜
 ちよあぬ日〜ハ〜く〜あ〜る
 約実の七〜さ〜〜紙書つ〜
 堀よ門〜ら〜又十〜ら〜
 山崎の錦裏〜と〜招月と色
 西〜〜暖〜と〜乃〜つ〜る〜草

披 意 房 考 意 房 考 意 房 考 意 房 考 意 房 考 意 房 考 意 房 考 意 房

東風うきの又雲あり其あり
 わさよふ脚をたさうりて
 後吟の内儀ハ之夜屋敷
 喧嘩乃さうさむささう
 大七川か日と二日る香の積
 香うきか——仲のさうり
 ちる極の糸掛ハ皆出た
 奥代世華と近年乃他
 酒うも来代やま月
 赤鶏江を庭乃正西
 定下ぬ娘のうらな吉川
 麻行乃さうさう之船さの夏
 多霧と信うまとおま松の風
 大工きハの奥うりいゆ
 系橋巨さかうりさし
 うさう市乃中を揮あ
 ばあうは生ハ花のけさ
 鴨乃油のさうめさ
 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

五月八日 辰 奥 杉風自筆
 流の形うり枯家あり
 宿とつ積乃店毎キ戸さうり
 之味線さあ家藤のえ食
 夕月夜直豆湯さうり
 会さうりい 秋寒さうり
 雲物さうり 誰うりさうり
 大草の茶代さうり
 力なく腕ほれうり
 信あかいさうり
 自佛さうり
 翼さうり
 物乃積乃女のお場
 伏見乃積乃京の
 懐さうり
 親仁くとさうり
 月をの青うり
 物をさうり

流の形うり枯家あり
 宿とつ積乃店毎キ戸さうり
 之味線さあ家藤のえ食
 夕月夜直豆湯さうり
 会さうりい 秋寒さうり
 雲物さうり 誰うりさうり
 大草の茶代さうり
 力なく腕ほれうり
 信あかいさうり
 自佛さうり
 翼さうり
 物乃積乃女のお場
 伏見乃積乃京の
 懐さうり
 親仁くとさうり
 月をの青うり
 物をさうり

考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

藤水のときくふる春の風
門の乃瓦をたさるいと様
時の月は一むし雨の降通す
菰の葉を琵琶を吹す 蝶丸
鳥のふゆ月おやもいふさかかこ
雪の海山の山をさう美り
入りて松の匂くの竹籬
佛のあをと非ハ情はし
黒紅の小神を襟のあうさく
こゝの茶碗と土質は出さる
なす戸狩れ二階と居るはさる
月夜満よ二瀬 洞をさく
ゆりまの一妻をあさる
諸の砂の台 袖の切形
秋の戸年くくくろ 藤切
をか作をき流るぬく
るは依は花咲山の何三位
田舎れ 春のなすの草

菰 菰 圃 菰 圃 菰 圃 菰 圃 菰 圃 菰 圃 菰 圃 菰 圃

銭列

山店

新麦ハのきとめめそ遠外
中々お故屋の 花をさるく
高射とさく 佛發の 花をさる
四五千名乃松のあく山
方く 醫者をしる 芳の月
踊の作法 待とおほえ
をさるの 花をさる 芳の月
ほく うれ者ふ菊とをさる
菰の葉をさる 男のう
ぼはく 俵をさる 啼く
市子さる 利上さる 花
言はさる 花をさる 花
只石中に 月をさる 花
電乃ひつらう 花をさる
あやうく 止人さる 花
奥の院おく 花をさる
片ねく 花をさる 花

菰 菰 圃 菰 圃 菰 圃 菰 圃 菰 圃 菰 圃 菰 圃 菰 圃

世石乃うを浮世まうして
 彼岸より心なく渡りゆく
 伊予ちりきりあまのくに似たる
 いまぬあまのいのちの知れぬ海
 えん徳のほつとくくちるるま
 人乃 佐を 横へり 采りく
 深く 藤吹秋の風 一さび
 院 簞さくた 本曾乃 縁の雲
 月の 霜亭 直ちうつき 物およ
 朽あま 舟の 了く 他さう
 唐人の 志乃 ぬ 初より たらあ
 志ちりく 借り 身より へる 徳
 何立し 一まも 涙目 ぬめたり
 埤乃 影と 借り 借む 香
 ぬ 木の 出 花の 上ま ぬく 舟
 赤き 一し 一しと 持り 舟 柳
 美さかり 舞う 香と 取具し
 うそ ぬす 舞う 中さりの 舞

道 仙 皆 川 通 越 通 仙 川 通 京 川 皆 越 通 仙 道

空の

言として 月よりあわむ 徳居
 きりくくきり 浦の 徳や ぬ
 まぬく 乃 美の ぬ 手 ぬく
 七し 老く 居の ぬ ぬく ぬ
 の ぬ ぬく 一 寄乃 ぬ ぬ
 一里ハ ぬの ぬの ぬ ぬ
 尺ちり ぬの ぬの ぬ ぬ
 ぬの ぬの ぬの ぬの ぬ
 宿る ぬの ぬの ぬの ぬ
 ちり ぬの ぬの ぬの ぬ
 放す ぬの ぬの ぬの ぬ
 つら へ ぬの ぬの ぬの ぬ
 西の ぬの ぬの ぬの ぬ
 ぬの ぬの ぬの ぬの ぬ
 ぬの ぬの ぬの ぬの ぬ
 妻乃 ぬの ぬの ぬの ぬ

越 越 越 越 越 越 越 越 越 越 越 越 越 越 越 越

つらき身代 隠居とて日暮し
 哀乃 居らるるをくやむこの子
 病をむかひくをきぬの心
 猿川 木末乃 松をきとく川
 苔をきく一松の徳を松に
 夢とあまひくをきぬぬゆめ
 ありし神ありとあふむ月の影
 典しくぬきぬき草の一株
 草のほふ草乃 後の戸を叩く
 夢を夢代とて子に伝へし
 位 夢をさうりきとて子の言きぬ
 夢をきぬとてさうぬ 松竹をきん
 湯より居をけしハ人よあくまはれ
 夢をきとてきぬ 鹿乃 砂 噴
 とあふる 山堂の 鶴 時 雨 の之
 松をきぬとてわくわくあはれ松
 法を傳へ 骨を 抱ら せ の 陰
 夢をきぬとて け 考 此 一 時

景 良 翁 不 通 翠 良 菊 不 花 翠 色 景 良 不 翁 通 翠

隠居とて 初秋乃 日暮し 野重
 菊 此 一 松 竹 を き ぬ
 小灯をきぬとてぬ 鹿乃 砂 噴
 神 一 通 翠 良 菊 不 花 翠 色 景 良 不 翁 通 翠
 一 通 翠 良 菊 不 花 翠 色 景 良 不 翁 通 翠
 夢をきぬとてさうぬ 鹿乃 砂 噴
 湯より居をけしハ人よあくまはれ
 夢をきとてきぬ 鹿乃 砂 噴
 とあふる 山堂の 鶴 時 雨 の之
 松をきぬとてわくわくあはれ松
 法を傳へ 骨を 抱ら せ の 陰
 夢をきぬとて け 考 此 一 時

景 良 翁 不 通 翠 良 菊 不 花 翠 色 景 良 不 翁 通 翠

併はさるゝを待しるゝ方の兩
亦小力よ志むる養ひけり
お中をなすことなるといふ
終るに終るに終るに終るに
所定にて拾ひ次ぎ此古も廢
唯日つくらやと云ふ事も
何多く庫一と名の輝き
富乃の中より川もいふ事
常井は越後を越す月夜
終るに終るに終るに終るに
やけしことちやうりけり
以兼乃の西より華をいふ
何をも待しけることなり
きつうの中よりちよとや桶
ハ橋を斤側をうりてなり
食苞ひけることなりの上
必はハ秋見の志と自ら
業をついに終るに終るに

邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦

徳和堂序

文料

此の部を要乃の角や約の門
材はたあかきとけりて横は
月よ依程の書と志なり
磯山より舟の舟より舟
藤より舟の舟の舟の舟の舟
紙より舟の舟の舟の舟の舟
人たはぬ時しくは泣くもあひ
之を月を舟の舟の舟の舟の舟
山食は様のさつては横は
尾ははとくつに舟の舟の舟
破き舟の舟の舟の舟の舟
可くくくくくくくくくく
菖斗舟の舟の舟の舟の舟
湯の時舟の舟の舟の舟の舟
電笛を舟の舟の舟の舟の舟
虫の舟の舟の舟の舟の舟
あきく舟の舟の舟の舟の舟
あるくくくくくくくく

邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦

わ乃方有戀境子のころ雪
ねはのちりた白くなる年
酒入の小千夜着きぬさく
もの陰よりおきりし音
嬌——き——つ——き——るを招こ
いさおころつを癖も世に片
門きり——桐の枝はゆきよまて
薫も枝きく雪よなはに
うけ合はやして通る祥あき
中夜はあはれ中立ち乃門
中の月とこ——名あふのた
ま乃仏の名あふ——たり
垣より湯殿のおれあきく
少童のむつきれ干場あき
傘たむきまもたのきやれ
行一口もきくぬ舞の目
赤心と掃あつめをゆり
何くつろきくたうら物き

考 丈 邦 文 考 邦 丈 考 邦 丈 考 邦 丈 考 邦 丈 考

晴景と云

晴景

雪ハ雪ハ河原の道とあままが
すく雪乃乃唱きくぬ雪 千川
門番の藤白も月とく 考
うさむき 神泉お裁の折 京波
秋風は庭とあり裏坐敷 山筋
虫も雨秋ハ目さえくらなる 借子
剛宮く夜のことと下なる 川
手本よ上巻を付く悔め 紫
尾も乃老尾ハ独髪刺く 子
多言ハ薄のうら社あは 箱
掛後と小神の敷とらる 箱
金乃雪と園乃をくはら 川
見ら度ハ源氏一羽の思ハく 紫
控くくき世れやをふ傳心 波
何あおも伊セの料理茶室で 爲
裾はくあきく内庭の砂 炭
朝月も雪の糸物や川さ立 川
日影の影乃雪片めは 紫

石是も香所のたぐはく此は
地は乃の権ふん西乃名苗字
定をいへうぬ麻の香を志す
古此いへうぬ又反の秋
中の月も権ふんおと権の破花
見よあ筆をさあはる
先を敢て出依頼の一繩手
着くはる内は権子乃下ル
うの字くも事は歳も言う
言ふとてなま権の影目
三條乃をさへう西河もう
系也乃三階ハ酒乃権若
英一も事と太り子下る
恨乃やとて外も事乃の事
茶喉も又事とて外の上
百荷もさ事とて外も事
徳も権夕日とて事とて
事とて事とて事とて事とて吹

柳 紫 爲 川 筋 爲 紫 柳 川 筋 爲 紫

鳥菴會

清紫

風流のおととあやほくまに
藤乃の事とて外も事乃の事
砂門のひとと又登の権も
門ちうさる事とて外も事
月の影ハ事とて外も事
事乃の西河をさへう
庫裏はの事とて外も事
ぬらみはの事とて外も事
三つの事とて外も事
かもある事とて外も事
川柳も事とて外も事
は事とて外も事
入新も事とて外も事
権も事とて外も事
小筋乃文とて外も事
かもある事とて外も事
事の事とて外も事

山 爲 川 筋 爲 紫 柳 川 筋 爲 紫 柳 川 筋 爲 紫

入船と四輝の似きく行ひくま
流るをまけしを乞食とて大
共うしぬ舟人帯此夢所
又とくしぬとて隠居とて
火桶とて隠居の暮る清洲と
暮る此粉ふるよ明日の振
返りの位ぬを押し掃く持人
たよりと面を名のおりし
暮るけし隠居とて何世の江所
せん自れより秋乃申の所
持人世の暮るよ尺由後の月
宿州つとくしぬとて
物の尾房さける 雄の童
雄水乃流るおのり流
密後世らの中を重なる
樽置とては酒中しぬ
やいやくとて酒中しぬ
葉を喰ふものよ怖る

葉 子 山 翁 山 翁 山 翁 山 翁 山 翁 山 翁 山 翁 山 翁

唐從正 國曰 岳何事 行 卷
條乃 為とるの 卷

米沖の志と 洋舟 廣勝 千川
極初も月いれぬ形とて
破ちとてくおく 琵琶を轉し
雪よりい事おむる此冬毫
出口やとて 冷山の砂
吹倒し 松とて 雪とて 雪とて
いれとて 雪とて 雪とて 雪とて
大の子れ 雪とて 雪とて 雪とて
龍とて 雪とて 雪とて 雪とて
家ありと 雪とて 雪とて 雪とて
涙のひきとて 雪とて 雪とて 雪とて
生るる 雪とて 雪とて 雪とて
暮るる 雪とて 雪とて 雪とて
巡行の 雪とて 雪とて 雪とて
兄より 雪とて 雪とて 雪とて
志尼んと 雪とて 雪とて 雪とて
狂つと 雪とて 雪とて 雪とて

葉 子 山 翁 山 翁 山 翁 山 翁 山 翁 山 翁 山 翁 山 翁

春階踏すの月をさびしう
さうさくくさる 所亦乃始
陽方の階夜子ら百を傍る
窓乃や子さよ入る 水風
淋しきまきみめさるるまき
旁乃籠き 何時の山を系
秋高の頁乃筆州柳
ほ屋乃門をあらく月の歌
人更のや月をあさるは
ふとささしくささるる
言むと日たれひ 死而
降か雨ささく蝶乃香
傳乃のやに矢並を流く
公乃かや来一門の金物
院乃より流川の言流の夢
えゆいとまはくやまき
けきハ川よりきまの流
煙乃せいのみ甲の苗代

糸 花 川 系 舟 系 柳 系 川 系 舟 系 柳 系 川 系 舟 系 柳 系

上人被持うてあさる柳丸

野放

日よりくま 雲亦乃さる
猿門の月を刃は山歌く
えらうさうける 雛子の誓ひ
暖小あうてもぬぬわの系
垣利白のく砂を男のゆ
丸もとせ揚う 流く流う
境の公事の内よ持たぬ
志白 松毛拍 鳥の翼
うさ世乃中を終く持たぬ
瘦腕を繋と一白橋を
やふ入せよとなすは
鶯乃顔うさる 秋更
お打かたは 扇を月歌
口くまの酒を試系
道い佛く 朝乃とりの火
吟あよ十符の若菰あまを
とや系知を 橋志布り来

糸 花 川 系 舟 系 柳 系 川 系 舟 系 柳 系 川 系 舟 系 柳 系

下七四

下をほ生千白れ船渡り
 あきつき渡り人の身さよ
 ころくこと一藤入て目のまる
 堂もろ雨れ程通し 勞
 其の思居く——みむの父
 布衣破き足乃好乃風
 松一戸れ月松橋乃月
 ふつ——てあ乃とさう
 妻戸叩く——あく陽う勞
 流して志く——れる果る
 あ——あ乃か——刺くま
 世の中れ茶茶賣社舞——
 孫あ尾張の西れ十萬う
 留士画う移く——う
 孫子登り——さおら——
 夕魚や其は場とら夜水波

馬有

人 舟 水 甚 處 人 行 夏 舟 人 舟

西りとさく——較乃下州
 ち——海津ふ船のつ——
 馬のまうらひみま——
 一——酒買の月
 程——穂夢う——
 松サ身も小侍も——
 ほ——ゆら半毛く——
 其はのほ——
 孫乃結き——
 物ひ——
 今の男も何屋——
 のふく——
 茶け味らふ——
 月影は若訓のほき荷りて
 雪乃舞るる——
 おの垂ふ——
 土中——

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

物さよ甲令ほふの花代魚
 伊勢乃彩又料理せん之川
 福代女とせし次と周の留像
 鹿もむさハカ方虚云えわさ
 喉兵と云後子成る青の月香川
 月見くはあさや種の中如行
 城も子田が裏さく松屋
 合長乃ゆり芳電代わく其ル
 派乃と唱よ法わささ為皇
 本も抱負くのそく岩屋
 作山やうあそそあ根勇法
 日やさふ島と上田のお糸
 夏の花も雨方次る毎の寄
 流りあまうくイ路ウまひ
 隠あいみのゆりまも法
 げ月まきり終る櫻叢
 むーり花小日思う雨う降
 あくハカ方さそまゆる常

舟 船 法 飯 川 行 始 星 月 星 始 川 行 始 星 月 星 始 川 行

雨中

さき

傘小押分足るや外父の家
 若そ子まむ嬢の葉法
 撫月やまは穂よまを飛く涼茶
 火のそのま焼りあくやろ望板
 洗濯をまきまゆきのつぎま利牛
 はめしねく又あそ吸物富波
 河入鹿の入系外し筆の書
 黒道乃松の押合くあ川
 とひらき一唐茶の茶室を夜攝
 ろあをまろこまあをわくわく
 伊勢のつき又後勢とまておに
 おこし若さる乃公の西法
 金辨名乃まて運られあ
 の曲を日和乃浦の初届
 秋も子麻くさうし一唐茶
 鼻くくし子乃幾ゆをや
 在而くまらわ花咲く
 瓢の嬢と拂し麻く終

子 牛 波 意 良 景 波 改 牛 子 羨 良 景 波 改 牛 子 羨

雪ふの春よりして紫の紙
 日記はよき一帖の紙
 縁はやきふ平目のみ白
 名はゆとりよく安藤の産物
 者伝はらんぬぬおとらなり
 え来たりり酒の香取
 焼くそく産は糺はるるの月
 巻は果てしなく帆をさし
 家聲は伝はたまはしむ
 夏よりを度のあるる
 縁はとりとるを産物
 紫の葉と重なるは床の片隅
 杜宇はいやと故やと約ゆて
 湖の色はよき水田の物
 為るの上は雲のころくと
 縁は雲とよきとるもの
 おおよ子伝のよき袋町
 のみ松林もよき林のま

子 葉 子 葉 子 葉 子 葉 子 葉 子 葉 子 葉 子 葉 子 葉 子 葉

左柳舎

まき

まき咲け九日と道下者の葉
 かくまふ川青月の高を柳
 新島志子の勢の啼かき路通
 まきとととと山乃智なり文鳥
 酒香のせきし隣子とぬる人
 かなほおひし文を想はし如行
 足の裏たさし機をさあさし
 二人の代書よきやあめし人
 免角より産物の中をの心
 手あつらうり代書よきし
 飽果し産物よきし
 虫ぬきやなれし目も
 月宮くは中あやそか
 暁うはれぬあつら
 一穂よあつら山の花
 塩をくひこむ春の芳らみ

人 虫 口 子 葉 柳 葉 子 葉 子 葉 子 葉 子 葉 子 葉 子 葉 子 葉 子 葉

小童舞の舞場を足さるべし又青
 舟の自由はま日よゆく元次
 月夜をくわ毎志を意の際 巴次
 智もさ時の瓦と後にか 川
 三福の云伝うらるる秋の風
 彼をよもくく門うあすむ
 志意をさるる草を山を介
 手鏡の夜代舞よりく藤
 由を下戸うらこの極を舞多
 至るり傍の生をあきき
 金到り一世の時乃を川盛
 行へる本瓦乃照りて
 たるの形ををく子彦を白川
 之傷つ事くく百代移る
 そゆくは男女もあそりへ
 有ぬよ百屋もくく秋の夜
 更くと白の極乃中川耳
 文 次 考 後 川 次 考 後 川 次 考 後

具はけひ極よりく一の他を
 土屋の屋乃有るふる雪 白雪
 物く嘴有るを木村来く 柳澤
 ちやの壁方の吹くさるる 芦丁
 浅瀬の吹るを昔者の月 文考
 壁老よりくはきりくは筆 以之
 扇下くくひ葉を押しく 扇車
 何うくひ極の鼻をのせり 清水
 けりは吹の吹る川を海を 柳光
 藪の吹るめく作山を吹く 柳後
 舟屋の目もくくをくたを吹く 柳和
 ま古の吹流もさるる秋 雪丸
 花を吹のくく切をの物 雪
 顔や吹くく 吹をけ月 草
 物乃吹くく吹く言る 水
 鳥をくくの吹くく吹く 考
 首をくく吹く吹のくく吹く 之
 二月乃離のく川つけの吹 先

おりりきまの井の中をけを箱
 小細きら細きらさゆの井浦
 黒傍乃傍乃鳥の鳴連く
 雨の音しりり雨乃降く
 亀の側よあきく目を裏
 松葉乃培れきき。襦ふこ
 稚子笛と首とよする。物の伏
 雪降きんくきやとつ備
 此こくとせぬ淫淫のききて
 深ききくくを備ふひき
 やはふふきやうんぬの月
 次たのり花を下してきき
 あれあきあき彩雨ときき
 るははひひする。門乃竹垣
 千鳥の遊くゆき。一。く丸
 丸乃志うんく。思き小俣
 号也子獅子の片しを摺るし
 むしききんく。肥るあ松

丁 備 後 丸 起 葱 備 后 丸 葱 之 丁 先 云 車 水

芭蕉

初草やせし白敷寝ぬ秋の夜
 去さすしねみ湯を谷川
 壁かより居村の碧地定て
 雨しこむ月と草籠の苔
 塩つきく焼くお籠のきき
 持くことほさる。草此川を
 心身ハ土持津を夕るき
 旅訪乃房の海よはよ言て器
 糸高代葉をきき。石の上
 至はしきき。持子
 四つ折れ蒲葉をきき。丸く焼く
 虫出くしり。持子
 月暮く雨の降く。虫鳴り
 猫の音乃傍り。ほめく刈大豆
 狗の音乃又親き。あまのね
 春より虫子をゆき。お切を
 花吉の虫と目え。お切の
 細き井。備水のほき。お給

水 郊 史 半 穴 菟 葱 葉 葱 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦

秀作はた穀は花の 様芝居
 の口やうま 伊丹 詠 白
 珠は子母を直に表 かく
 是は能竹 隠いけけん 物役
 已まらざるに 世をぬく 世の皇
 娘はあはれなるを や 唱より
 袖ぬきを 採権子代 意を
 月を倦し ぬき油 此物
 公事ふ 百んもの 門を
 傘をひらけ ぬきあへ 係 ぬ
 見る月を あつ 一 年の日 霞
 出度く ぬき 隠居の ぬき
 千物 ぬき ぬき 積をの ぬき
 手拭の ぬき ぬき ぬき ぬき
 跡をぬき ぬき ぬき ぬき
 人つ ぬき ぬき ぬき ぬき
 意も ぬき ぬき ぬき ぬき

茶 邦 茶 水 茶 邦 茶 茶 邦 茶 茶 邦 茶 邦 茶

元禄五年 十二月廿日 申 奥 才 成
 お秀く 茶入 梅 梅つ ぬき
 後 ぬき ぬき ぬき ぬき
 目もぬき ぬき ぬき ぬき
 羽織の ぬき ぬき ぬき ぬき
 夕日代 ぬき ぬき ぬき ぬき
 出代 ぬき ぬき ぬき ぬき
 あま ぬき ぬき ぬき ぬき
 肩 ぬき ぬき ぬき ぬき
 足り ぬき ぬき ぬき ぬき
 茶を ぬき ぬき ぬき ぬき
 下 ぬき ぬき ぬき ぬき
 つ ぬき ぬき ぬき ぬき
 む ぬき ぬき ぬき ぬき
 現 ぬき ぬき ぬき ぬき
 ぬき ぬき ぬき ぬき
 二寸 ぬき ぬき ぬき ぬき
 ま ぬき ぬき ぬき ぬき
 茶 ぬき ぬき ぬき ぬき

堂 晋 山 吉 堂 善 鄰 山 益 杏 晋 堂 銀 榎 山 普 子

是乃の香もなを秋の電
もくくあを梅の影戸極
山を代つらうは川らく
好くうらうら各歡の下男
名あ白い様う座の心まわ
思ひぬあま屋乃の心持
言ひまや青の宗の室うら
集らるるうらうら心まわ
見ぬ振のまなまを志しけり
あううまをかかきうらうら
路うらうらうらうらうら
後をうらうらうらうら
松茸の心は海山不
息をあま子うらうら
老うらうらうらうら
あの名あくうらうら
分はうらうらうらうら
ここのの影れうらうら

都山堂夜香山き京晋堂都香山晋志山杏

元禄七年三月下旬洛参る時 祝竹

牛流止村のうらうら
喜葉のうらうら梅極乃を
一枚乃延のうらうら押合を
柄もこうらうらうら
月影の草の生は萬のうらうら
境うらうら田の中乃ら
家くうらうらうらうら
うらうら月は十五といふ
秋も雨をうらうらうら
居うらうら鴨のうらうら
抱くうらうら山ひろきうら
あの人うらうらうら
白くうらうらうらうら
うらうらうらうらうら
極うらうらうらうら
各うらうらうらうら
乃うらうらうらうら
中うらうらうらうら

去来 芭蕉 推奴 大牛 文考 末 竹 心 野 考 妙 妙 妙 妙 考

川舟の湯をよみたるを如きみ
燈の光をよみたるを如きみ
雲の影をよみたるを如きみ
世はれよの影の如きみ
腰の影をよみたるを如きみ
昔昔に由るの影の如きみ
朝の月影をよみたるを如きみ
かたかなをよみたるを如きみ
かげんをよみたるを如きみ
あまをよみたるを如きみ
何をけしをよみたるを如きみ
吸物をよみたるを如きみ
把後乃お湯をよみたるを如きみ
釜口をよみたるを如きみ
日ノ光をよみたるを如きみ

的 考 行 明 然 意 行 明 然 意 行 明

芭蕉

月影の如きみ
大うらむとけしと挿
かたかなをよみたるを如きみ
意をよみたるを如きみ
こころをよみたるを如きみ
夜をよみたるを如きみ
ついでによみたるを如きみ
古向の風をよみたるを如きみ
終極をよみたるを如きみ
そらをよみたるを如きみ
ふいふをよみたるを如きみ
ちよをよみたるを如きみ
月影をよみたるを如きみ
あまをよみたるを如きみ

安世 支考 空草 土枕 丹莖 芽 世 考 芽 終通

石塔と又よつと観音の
 宵丈伸 ち快きの
 小工面子仲 同ううてふ
 まりて出 して言へば
 結草よびとてさうて
 別はの所れ ちうけさ
 明月の餅 又あつて
 ちうけさ ちうけさ
 萱草よびとてさうて
 毎はうてと 詩をよ
 女房よ只 笑されぬ
 尻をれ 武士乃 け
 土手箱の 笠井ハ 杖
 田の草 時よさ 不
 坂の石 ずハ ちう
 ぼくけ ちうけさ
 病わや 結草よび
 ちうけさ 向て ちうけさ

元禄七年 大津市前番より 百蔵子

高下りや や水の 里は
 笛乃 音 出ら ありき
 一つは 鶴の ありき
 ちうけさ 田を
 笛乃 音 ありき
 腕押 活き ありき
 若原の 藤 此中
 ちうけさ 梅
 柳灯を ちうけさ
 俵衣羽織を ちうけさ
 浦く ちうけさ
 古き 名 俵の ありき
 有明の 洞 ちうけさ
 志つら ちうけさ
 手形ひの 衣を ちうけさ
 籠子よ ちうけさ
 杖 実を 登り ちうけさ
 ちうけさ ちうけさ

式之 芭蕉 夢斗 村靴 梅市 梅額 斗之 市之 市之 之 之 之 之

年茂よりいさきやめし休ませ
保止あまうととるのしり
ひ焼の上より白く顔は
五よき悪書ととるる
半部とて口を雨とるる
舟の根をやくあはれ
あつくとあつとの根を
ぬくとむせむる悪口と
宮の宮さむしとて
重りともいふ
髪はやくあつとる
本より十さうし
ほはれの中縮は
桶もあつとる
投あをすつとる
そつとるものを
あつとるを
はくとの肥る赤出れ

意 希 然 意 考 然 年 意 考 希 然 考 然 意 然

伊賀の申春典

とら

種芋やあつとるを賣出れ
片煙ふきけと
酒好のあつとる
ぬきくつとる
有的の七つ
ひさここれと
秋風は松の戸
小使のくも
屋とくと
多賀の抄子
手槍の男も
人よれ
萱草の
秋の川
月を
こぼ
葉の
板北

残 意 考 然 年 意 考 希 然 考 希 然 意 然

猫の目代六ツ特様は四ツ香く
 聖日代ゆゑの織菱菊若
 加し白く宿人全川ハカサぬこ
 多し一呼く出る 髪ゆひ
 髪ゆひは細屋の髪をぬぬ
 髪ゆひの宿代にあつてひひ
 けはたてよまよまよ考うろたを
 やまよ元後のあつたうろたを
 物又まよまよひのあまき搭廻り
 むしとゑなるゆきまの尻
 田嶋れ縮をまよは月代
 同ひえむむむ牛の子代旅
 音くくろ報のまよあつ神はし
 志なまよく此何よ成一
 神風やまよまよるまよかえぬ
 筆をまよまよまよ鳥鳴あつ
 志くくと一重代まよまよひ
 長宗まよまよまよまよ

不 芳 跡 道 芳 不 道 跡 不 茅 跡 道 芳 不 道 跡 不 芳

牛部屋は奴の夢より秋の風
 下樋の上り蒲菊柳は流酒堂
 酒志ほろ常あうに月まよ
 あまよ四よ本まよまよ
 長宗まよまよまよまよ
 蓮れまよまよのあまよ
 後指もまよまよまよまよ
 極りのまよまよまよまよ
 体まよまよまよまよまよ
 溝級まよまよまよまよ
 生能まよまよまよまよ
 むつしまよまよまよまよ
 秋の月まよまよまよまよ
 為縁まよまよまよまよ
 分別れまよまよまよまよ
 宿るまよまよまよまよ
 寂かなまよまよまよまよ
 たしけまよまよまよまよ

史 邦 大 妙 玄 未 正 垂 益 董 邦 州 未 垂 秀 董 邦 州

人心常陸乃必いきく久梨
春月すても寝きおちりけ
うさるひをてけ并よ後を障き
絢買あいの障ききぬく
硝子に減除を申於茶酒
楊咳ハむりー信然
州むよ麻所イニカハり掃後
明る乃障の太靴おあし
大口いハおれー一極ちるあ平
カール似をぬ磔うハを茶
けらぶくせら中の香既云
菘くくきぬ忍海乃月
白いああきくくちりし物前
すも靴乃子前あひまを
手よ持ー物見あふんそくま
油物やぬ電工瘦く
常の危大痛しとるぬくて
やれまハ風の多まけてそ次
靴筆

来 秀 苺 邦 堂 意 秀 華 本 妙 邦 善 苺 秀 来

いさひいさか園のそめぬ
猪赤乃垢をりゆらけひ船 宿子
近る子鶴は富を踏付をり 依水
かこのそらひー一糸乃持次 依
乃返をえ屋根の口乃照村時あ
ま葉茶考り香此回今めあう
家信よのなき女房の負きき
ねいりくぬくま山丘の發
着室子まらりてて草鞋奉り
りー一此あく糸此名をば
鵜乃常子希き流のきりて
を争々の曲端をき結ま障
板乃板まりー糸方芳の月
候侍くもふ後の障あ入る 苺
独イニカハ信あふおを志けく
恨く糸くや一葉の管のう
都より十日も遊まおさころうり
尻をぬくー一独活のゆを

子 依 苺 邦 堂 意 秀 華 本 妙 邦 善 苺 秀 来

手鏡を御師の下へ奉祠
名は——かたは元もかたは
持はぬぬおた力を女を畏
よんはは解する事の振髪
夏川よ夏月の影を踏ちえ
乃祖乃孫——る月を尺摩
赤恋ハる赤の芽を積を
眉作らあまよか——あかみ
大系乃細巻墨ふろ——
敷多く股あを牛もあまこ
冬此みまよこの——らを
初階あふの松をつついで
老り草鞋乃山川ぬけや
船すきとあ影の影を麻元
筆あつた猪乃みり
書るふおるふあまきおの山
春風は——はれ
子 紫 道 子 紫 道 子 紫 道 子 紫 道 子 紫 道 子 紫 道

元禄四年

とま

女くと出くひさよふ月の手
舟をるくく並れをを
初めまてはも格ハぬ存の
獨こそけけるまれせり
空ろくと成ハあるやれ
城はとと中あたら乃
赤物よ手訓も脚乃をま
石れ音指の虫身をよむ
鶴堂の夢をたうけ難ひ
念はう——甲を時あま
梅子あまの路をみお
懐を隔く若れ方介
月影よこ——まる白の上
只ち——とまこくと唱
初こそき袴り結とあ
髪乃ふ髪をたこ足付
年くはあまよひ友の教
軌る車とせうあ乃白
成秀 格通 大州 惟妙 務睡 正則 楚江 勝重 草皆 兔茶 正秀 則 重氏 重古 五 州 則

元禄

青れ葉乃下八夜と吹おろし
呼くるものゆらきまをり
正幸
有るふつてみきりんをさく
江
ゆらぎのゆらぎをさく
峯
行鳴きくみきりんをさく
多
七もくきりんをさく
多
風やうき流るの流る
多
只一はと飛ぶ鷹をの
魚
ちりりくはきりんの言はり
葉
月石をあらはす
叶
秋風は細乃をさく
苔
西をむく種のみさし
魚
斤端のり子なきまをり
魚
方毎ふた力のそらをかき
重成
長橋は館かりゆと赤砕き
柳沈
ほろまにゆきくおのり
魚
磯人のおあはきりんの法
法立
南ありてりめくむきりん
香

又考

世里八山と四回や冬こり
まろく細くまの岩窟
冷水
ゆきりハチの一種の藤を
白雪
ゆきりハチの一種の藤を
雪丸
ゆきりハチの一種の藤を
松隣
小地法のおまをり
扇車
終りのまのぬり子の前
以之
龍乃乃梅子のまをり
桃先
代終をり九世の観音
桃後
徳乃乃梅子のまをり
芭蕉
あはれをりつくと後の世系
考
悠のまのぬり子の前
考
切く付るの藤の三日月
考
空初ら圍垣ま善法をり
丸
鶴乃乃藤ハチの形をり
車
花子ぬきハチの二世をり
之
まろくとハチの公座の白幕
松

三四三

履しくと膝よりる雪かき
 襦子乃くたる味塩の曲也
 冬と虫と童の筆ととととと
 あーの松を与守松仕事
 海にこー福の代志おとゆき
 秋風をこー長靴乃墓
 冬と畑のあまむすまはたて
 小泣らのあまむすまはたて
 さぬくは意ハるカ貝忘貝
 乞食と成く丈婦かこふ
 こーむらる脊中の雪と打掃ひ
 きりる法を押並をこり
 素ゆ一ツお寺えんけと評
 荷を履るの半ハ麻ころあ
 冬とくとい日向の力代家盛
 やぬまの糸いりる石
 急化すすめぬる棟の多
 又炭皮乃保生目か皮

雪 先 石 雪 後 車 之 扇 道 考 丸 靴 先 後 雪 冬

中夏

袴やくと帯を束る板家
 舟乃とも月を初あし吹
 約月小鶏せん尾とさし
 正乃んたる橙豆膏賣き
 大ハ乃身ノ舞する細小海
 膝その氣又編まも足に
 瘦なるくあ他開く川表
 雪中ノ牛を徳中とさや
 嫁ハ代まく娘やまつはへ
 杖と子履をけりておく
 一くお字とさるる目取歌
 新約(箱)かぬくは秋
 ちまれけりて甲も細る意
 昔の麦粉をさすの帽子代
 立存く文きて意店の溜
 新粉手より組母の巨形
 さん丸は花の本陰乃こり
 何とてとさるる北の吾風

袴 先 石 雪 後 車 之 扇 道 考 丸 靴 先 後 雪 冬

庭菴屋よき葎等とてかき焚
 たりしのりらふ子と巻る後
 冬柱乃九子母あしお後
 多まよくまゆを居月呂の偏
 持能乃一冊所とつりく係
 何房きくともなほくつれ
 育れ口入形する及々市
 茶の香気のぬらま小茶権
 間あまそ又思いくる馬のさ
 や中ふや——家ら巻坂の枚
 有咽とまき——巻そて言とせ
 露しくふらうり痛やとけり
 川あそくあまりして巻杖のつ
 独たあまらうりさふある升
 ぬらくこ幾世るま付る貝の壳
 むく川さふえらつてく船船
 けらくと茶のぼらるち子え
 板まき——る土子のあま

袋 翠 吟 維 芝 芳 袋 道 維 終 茶 芳 翠 芝 袋

元禄七年七月廿八日

猿 維

阿まきくくまへぬゆくゆか外
 を此の——とあ言雲の縁
 約月取かまの樹造付そま配力
 茶の柄らあ川暖原の敷望翠
 かくらうと柄をあらま維あま土芳
 新原さうよ袴るえりたり卓袋
 婿甚をわサキあまかやう——
 名ぬ——と地下ととら巻るお
 焚飯ハワくても中のつめさく
 おりひ給るまはぬくつめさく
 けはああ茶の要はあひ——
 ぬられ西月をさ石崎しと苔蘇
 根指のこまの需を扱ゆこ力
 お携り——あまらくまらる外
 山陰と山ぬ——村の云と構
 ぬらうり——新乃舞の象
 焚き——る茶茶中へ巻るあ
 土うははらうとまこれぬあ

道 芭 配 翠 土 卓 袋 婿 蘇 苔 力 維 外 象 舞 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇

五五

梓割ふ川際此る積あけく
 日たすくくく風やう合ふ
 大名の仇のせきのなきまき
 むういふかの都る雪乃屋
 一糸々代を揚ぐるの海の物
 多しひろくこまあはくする
 千加のひのさるる三ヶ月
 神皇八津位を揚ぐるはく
 志たすくく名り体い代士
 衣まてし藤まらむ静なり
 かた「遠」の軍の口まき
 耳たふそくく極ま標しま
 りま入るくく雇ふ六人
 大ぬきま喰いあくら末の陰
 第乃洞子此まらむ二月

藤 力 翠 維 芳 益 竹 翠 維 益 力 芳 翠 益 維 力 藤

色蒸

高き葉乃目ふまきく石乃塵介
 おきまのあを儀と物 月
 冷くと親の斤身と打のけく
 何くともまはまはくハまめ
 小ぬきまにま太の落ハ味く
 都をとらつてく玉くの藤
 あしまの神は能とあきてる
 袖まきくよま親の父代
 垣越まちうとくくくのれんま
 普法乃うらハお屋てまを焚
 之くめま極る娘のまめまは
 酒買りくく唇 子福のすうれ
 まゆくと月の出るる松の敷
 松は免いあはるる町布の純
 とくくや「深」くくする青藤
 彼岸乃めくはこ山くくする
 ままはくくくくくくくくく
 かうりくくの一あをくくく

ろの女 楓竹 留川 文考 惟給 酒堂 舎羅 何中 意 女 竹 川 考 考 生 氣 守

思ひま本帯も四月の梅物
糸の杖つゝ岨の夏むさ
斗のさ乃乳を春日教宗と
かきうふくゆる竹のわら桐
備つゝも葉の緑く細糖
ひとくもをさるる明の松
為雪の渡のそ身は海兼て
狂歌の傳はな花さうり
さ好低は洞をつむあわ
あつけの糸ふ上の袍さ
帯さう葉まの葉は裏きて
よる車のをさうはくり

芭蕉
東菴
桂拵
叩端
桐葉
工山
菴
閑水
箱
水
葉
揮

楊子とあはれをさへ道の電
盃さむしく酒飲めり
有る子餘は木城と前勢
高ふあさう庭の砂系
小は門は約引むうの
推乃古紋と梅うおそ
いちこお山さう村の面
老多うさう夏乃書
お陰くく重藤あさる物さ
けつみまきく車返一つ
橙を電よさをも摘る山
神さられし葉人のる
接作らあも梅さまの風
三日月あく節白知り
糖をいり初川はる花
葉は侍乃志さう魚の
佛即信小端白髪と探
枯く常盤入る白中の竹
今後はあはれは
しるはあはれは

茶
葉
行
意
茶
葉
行
意
茶
葉
行
意
茶
葉
行
意
茶
葉
行
意
茶
葉
行
意

なまは箱をか移るく 体旅

とらぬ徳まわの財由よる思収
山と川まきよりわたりえはん
つひの仕奉へまよおきかうて
恒ゆめあをけりしとせし
折つねく可射もあまの明子
山雀を籠と籠る小坊を
秋風小福うまの優と長男と
まろくしをま福く
踊福の管やううさの蕭の振
念仏乃こゑの雨のゆのゆ
別まんとつめま山袖あてめて
おまのままら乃意たあてま
夏宿居るまの妻八戸のま
米巻はくしく相買まり
駒あふれまのまを打まひ
端の月乃まらかかへ
初まの系まを養 作くま
目別くまをかかるとま

元禄五年 七巻

葛藤よまの膏の勝るま
吹上るあまの 巻れ雲ま 嵐
取踏くくぬ踏をけはま
七耀山をま出く家 月
町代をまこれ 集るま 砂
あまおくはまを渡るまの血
坊まをま老まをいまを遠ま
士れ候はくま 神事ま
ま毎小福付く 烟雨ま
日まをくまの松 松ま 切ま
ま白まを盛るま 食まを封ま
源まを影まをまをまを
吉れ松の念仏ま 慶るま
小隊の福乃中ま つま
扱く 折まの石ま
徳りる 徳や婿まの月
あまを垣根まを川麻
くまをまをま 叔乃ま

道 香 兼 香 道 香 道 香 道 香 道 香 道 香 道 香 道 香 道 香

力乃さきも才子の足跡もきき
和泉代わりの桶乃多よれ
紫垣乃言きまきハ破屋より
傍もせんより推いこり
の身代思ひてつる 秋の風
髪切泉看の月そひひめく
長つより西の野乃種ひひく
満つるゆまひ何と管へ
坐巻乃乃後ハ水仙梅橋
雪より動置ノゆきうる
やとうせんたちの岸ハ新巻
削るゆきハ伏巻のふく
山満るも先週ハぬ念のゆき
祓宜り被り種もうん
世も 鮑も物ハありあし
只こいしくゆき田雪後巻
雪 菫 雪 菫 雪 菫 雪 菫 雪 菫 雪 菫 雪 菫 雪 菫 雪 菫

古き仙よ二白き

夕照

泣荷

晴吟ハ露を抱ゆる西日よ
涙前々れ 芦の穂代上
雪の印種を隔る 松こみし
雪よりはさすも 石亦乃家
八月代爲他 折る 雲まひら
葉の雪よまきとあやとれ
山ちとるも 流のさほくと
芯より身もとほ 送るト
夕雲日よまき 鞠の青
白きゆ様 の 垣と 庭 哉
傍ををを 様 の 垣よ まき
乱まき 髪と まき
洞白形 形の 敷きも 出
何え 巻 けり 雪 けり
梅の月一の雪よ 浄 庵
淡つき初 一の 東の や
みくつ 代 己の 巻 けり
四十 雀 けり 巻 けり

雪 菫 雪 菫 雪 菫 雪 菫 雪 菫 雪 菫 雪 菫 雪 菫 雪 菫 雪 菫 雪 菫 雪 菫 雪 菫 雪 菫 雪 菫

江戸橋をよりしりしれ

独子

薩摩乃あきしりる月

芭蕉

圓路ひくくしり磯列を

旅吉

群てたん此肩よりけく

其角

夕の誓れそあや祖冬

芭蕉

根松苗枚探乃幸夢

子

池の橋渡し始ぬ垣結く

南

三州と入帆乃あや屋指

雪

世の中を馬のふれる葉の煙

子

姉のあしり代りりやさき

芭蕉

かみそり袋の切のそ川くぬ

子

多を占さく一園の物風

芭蕉

波のぬれあよとと花夢く

子

二番と多乃乃けく一侍

芭蕉

一差乃蓮舟をとむ心る

子

苗代もゆる雨こまらぬ

芭蕉

雪の葉代りあや夢あふ

芭蕉

糸直下りりかき春の夕月

子

子庵憶人

獨子

名月や藤ふく雨の煙を侍

芭蕉

家くまらるのあや虫の言

芭蕉

秋をけく春よ定るる乃色

千川

すくかゆる水の酒れ試

添紫

燈半らぬ鼻夢あや懐み

山翁

依りきたん坂乃下よる勝

子

彌人の老をのきよと手を振く

芭蕉

まらるる霞より雪のちりぬく

川

入口の燈籠をよるのむらり

芭蕉

きりりい雪の折板をさく

子

毎季りせそくあやうき春

紫

煙のよそかなを洗ひ惟子

川

依りすく切も足袋の春ぬて

翁

食乃ほきをそ浪たより秋

紫

月影のあやうとそ思ふ鳥帽を髪

子

衣のそ乃ぬらひゆる

川

おほくもあやる車川より

翁

ほろくもあやるぬ春の南風

翁

之福三三九月二日為志の板

不知

聖徳太子塔 少きまき村御成
 山よりつらき日ぞ 新の意の 荊口
 初月やす月 西窓をそつとて 翁
 波の意すくく人もあつた 如行
 本をひめく 梅の程と片一 尤押
 酒の意もあまらぬ 一 凡 妙香
 おのつらき橋の松とちむん 斜炭
 直なきあやふあつて 武士 無凡
 いまも一まんの文とく 知
 豊の意の面を 面影もたなく 為
 侍青の程を やまの思あり 切
 葉多川ぬ。 月乃乃小道 柳
 為多すく 松やとそく 為
 細代の縫と 帯もむきあら 為
 島の松屋よりして 替りたて 為
 上福よりして 猿代さくま 為
 石のつらき谷の及 橋ひさつて 為
 欲くくそく かく 世の山吹 風

みれおめ二兄の七五三とての事

翁

藤井くくくあまのまき 翁
 彌賣 猿代 山口 翁
 村乃地 翁 小おとす 翁
 ぬくくく 湯のつき 翁
 葉とすく 松乃 翁
 意の意の 翁
 立かうひひ 翁
 三味線を 翁
 よううて 翁
 第一の 翁
 稻荷まひ 翁
 初月の 翁
 そくくや 翁
 侍の 翁
 おひひ 翁
 羊扱の 翁
 法乃 翁

月よりとゞくやみり村野
 山雲のかゝる柳の影山
 男麻布の影のさき万葉
 舟より白く海の影川
 泊る手は藤乃枝や一里
 襦子おのゝむたのひの
 物生くもくさむ日多
 夜際るる一南毛乃花
 是よりあまのむすむ
 ることえきよのさし大
 酒光景
 の凡台らる音の影か
 ぬくさ葉はれ一むまけ
 結
 傷ややそ乃あゝあ
 伊豆乃海は海舟を
 令
 云と夜乃法一室
 定し

才女仙二内ふり

秋後五白津

をを

文月や六日七世代

霧をのきく取相乃一葉
 物霧小會替烟立か
 夢の小舟ととせよ
 鳥啼むり小山と
 松乃乃る上茶
 夕嵐庭吹拂ふ石の
 多しむらさき
 思ひうけぬ
 きぬく此揚小
 ぬくの恨乃雨の
 鏡子掃る影
 物とる小朝
 藤乃る
 右打
 多川
 志の
 蝶乃羽

三三六

春雨と髪利児うなみこま
香の色くくよくくけ文
良 葱

おれ一研りく 右宮

翠の青柳の駒牽くぬ後
色香くくよ初刈り来 良
片くくぬまきく布つこ 色良

叶方十白キレテシス

秋風了る父の孫 立
かのそと錦の白捨あ
絶て継きくく必乃古堂
拜極く小枝よ花の名を
雨乃あくあの日と古堂
糞を引き車もあうあ香の上
一むかかき人馴く飛あ
金岩徳テ小砂を捨あらん
科の心くくくを陰の電
也 右 香 良 也 右 香 葱

憂るくく百その果の名を降
人軍くくくくくの元
松柏着く菊の着まわり
子を射させくく 猪乃奈
依りあけ袂をぬけ吹あ
従古乃月少く 台あ
捨皮むく老の尻乃新あ
志くくくあ物の海く手於全
塩境の廻村乃廻を踏あ
法あ又波のま片くく
かくむきく地着の橋まあ
種磨あくく 里乃素あ
くくくくくくくく物陰
他借を尋くく必乃宮あ
あ本紙 右まく 梅の老生
良 葱 香 也 右 香 葱 也 右 香 葱

傍旁松系堅成く電良香
全の半着玉持

唐の青い青い結を門前
遠なる子乃るに居所
裏合を板敷のくろ 葎の岸
坂乃れをてつて母の
手家く母は是程の遊りし
ほく酒のそ糸あ乃あ
とくくと極は風のある者
稲盗人け徳をあるや家
月見のハ親もふまのあまを
こはきく家ハとこけく
伍り判るあま斗ハ研勝
仕付くくもく尺 舞方の客
回張極の向をい乃稲のあま
とまのり舞一青の林唱

古分仙は四白と見

坂、道 坂 道 坂 道 坂 道 坂 道 坂 道 坂

水もや小船のいさじ二段
柳をまきく岸乃かり株
えしをるこ切伸乃有めて
力の極くくく 伏殺
食傷の腹を平く朝の月
登海く狂ふ登乃友連
小構りあまをま程入る如
核一文く下茶と信る乃
落葉乃立の思きと時く
糸の赤ハ夜の 敷 鏡 単 良
名をけくの子休く今子
古きを解りくくり鏡と約
小さくして砂揚を歩り糸の
蚕を織く推う喰ひ初
月影の向も仏の基坐之
盗人く草の 伊 三 氣 道
皆掛の流木のかよ花の
くや 跡 今 け 遊 打 細

湖風

坂 道 坂 道 坂 道 坂 道 坂 道 坂 道 坂 道 坂

けりやのふねしふ秋のふ

廻乃留のふりりかる葛

月多し心考麦のこりまの舞

ちいさきあそびをゆくあ波

とくお羽織をへてあう

あうくみのみの中あは後癖

河流の男節白の度あま

唄乃のまゆりあふ梅ちり

線多し春のまきのゆふ

あは次乃の線れあう三月

兵乃有しあふあはあ

かくさき草りあふ松風

あうく山田の稲あう

地乃乃埋あはあ

仕りあふあはあ

塩絶乃のあはあ

あはああはあ

白髪ぬく枕のりや

あはああはあ

あはああはあ

あはああはあ

あはああはあ

あはああはあ

あはああはあ

あはああはあ

あはああはあ

あはああはあ

あはああはあ

あはああはあ

あはああはあ

あはああはあ

あはああはあ

あはああはあ

泥足

交考

遊力

之乃

車庸

酒在

唯止

龍柳

足

翁

考

乃

止

乃

乃

之道

珠

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

杖の杖とちちるしとふ新うの
 月まのほらとせん才よまはく車庸
 西の山よりほろにりれ居味く酒堂
 いろは牛のまて新くちや遊刀
 胃の名まんまや野一吉性も力
 小神とゆいてわゆる大年
 使やる所とまると折打すれ
 整てて医老の又とまをりり
 拭ひしと熱くのねきりり
 去りおく家赤ありの枕
 紅より玉若くちて暮か
 まいたうかきいすくらえらぬまひ
 蕉の事ぬ夜八宿ちんちの換
 雨され月の細き川すち
 大ととく茶師を下るけう境
 七極まらゆるけひりちや
 二でてるの島新れ赤ぬむや
 小鼓さうし令杖れま家

支考
 惟然
 楓牛
 遊刀
 酒堂
 車庸
 力
 庸
 考
 堂
 力
 庸
 考
 堂

あつし

あつしゆまゆとるを赤松の種
 一羽別り千鳥一群
 枯るよふかく松のみさし
 田中乃及れあつる善ゆく
 月毎く已う家あつる
 秋風上京川のけり
 露の糸絡とを松の善
 雲とを毛一葉のまを
 磯戸く甘あつりれ情ぬ
 傾城うけとかく本
 楓葉

松松よまはひあまのらみをね

左木

鐘ありしとく
 云々々々小ねなる柳の子風呂
 なふの細毛

詳六

吟味くはハ踊の月もゆく
檜まておとくもゆく
繻細干場と書書の羅子
編笠紐入り入る何ゆ
神吟の草も舞ひとひるまて
と言ふれと地中もあはれ

那 本 六 良 邦

おき器

如風

吟しや為器の此乃為器
剛士乃、菊とさゆは梅
所車代書とさる書くま
神を祀りしころの夕月
矢中代夢ほろむる花の風
かこ乃をさふらけ篠屋
言仙あり器とあり

色意 安信 重辰 自笑 知足

七ん去器

知足

梵飯や伊良古の宮も能乞
砂さきくくく一歌足の縁
松とぬかみ君々子何れ
いつく鳥帽子乃ぬき去る
成身するれあるぬ暇さ
器をかくは 権衆の月
人

色意 知人 足 意 人

おき器

竹号

幾為紫その宿神をわらふ
疎麻乃 書とんさるあくる
よの月君もあはれく
里の踊りて燈籠折り
野水

寂照庵小橋ゆき

越人

至岸やはく小橋とも思ふ
雪とくくくは花はくくの松
誓の子の縁を告る因吟と
脊えんすの車り踏こは地
あふよん 世若月をあひやハ
若麦乃黄と通して第吉

知足 色意 人 足 草

あられとてはゆや好し金全り 如行
ねれ文子まき 竹さゆらまう 夕道
おほく撮とまきくぬく確除よ 荷子
ゆのゆやまきとくゆらぬ ま魚 野水
はちやく山よりくまの言の月 芭蕉
待つく杖の階子ほくく 季

実新宅

大巻

終家や雀ふるくさ脊戸の林
蕭々し尼のり雪兼刈りぬ 知足
寺後生此乃編橋旁こめて 安信
風呂焚よけ 月乃 曙 兼
松垣のあやいさすさる鳩の色 足
と川雲下まきく赤子揃り 信

羽蓋

いふんぞと筑面うしとちあ片
階火よりあられ 枯糸乃松荷子
本職州下馬小髪と茶客して重土
松心より言を扇川と新雪杜必
新と塔 かげん 月を海翁
ひくく小橋をすくた収阜山 整水

そ達の色もぬまうりき

雪く八月八ととを依菴子

付く 風標

深川と董坊く壁と壁分所
春入知小橋のあー何と 在依
初寅のそいぬ市は日知後て 一日出
物とく月入るま古やのこり 琴音
牛車つまきく雪の乃や止ま 雪上河

お寺界

旭里

雨降く粟乃芭咲く徳ん流
心川ま乃物ま啼おつる蝶 等弱
夕食くお好くお雪月出く 芭蕉
秋来よまうと布あくるく 兼良

下巻

啼しきや海よ入るる雲上川
月夜ゆをなほは彼のさき海松 今道
黒鷲の影けをの言ぬく 不玉
紫とを雨ふるらん雲とこれ 定陣
梅より乃朽敷他里て市と橋 並良
影しきまうけの宵月乃油火 任曉
ふ梅煙乃をよきまの 志衣 扇風

羽鳥より 舎瓦

つとねよの世は輝ゆく山岳
秋の志事とをくや三日月 色意
破傳ひよ東のらをあつて 不玉
以るし終るるのあ—— 依 巻五

秋後より 田細川 朱菴亭

みさき とも房

茶梅よいつきの色とあまう

本賦より 見小燈と茶客して 守五
松心より 言を海川と 初雪 杜必
新の塔 かけん 月を海翁
ひらく小橋をすくぬ 收阜山 墊水

そ達の色もあまう 巻五
あまう 入日月とをを依菴子
付く 風俣

深川と菴はく燈と燈をふ
春入知小橋のあ—— 何と 巻五
初寅のそ——あけ市は日和けて 一日明
物とく月乃をま古やのそ—— 琴房
牛車つとく——巻の乃や止ま 巻五

かき果 根里

雨降く粟乃を吐く 後ん 爪
以川を乃 妙子 呼おつと 輝 等弱
夕食くの 始ふか 雪の月出く 色意
秋来よ 夕くと 布あくらく 巻五

啼しきや海へ入る宮上川
月夜ゆきをなほ夜のまほ松 合道
黒鷲の飛けき座の空ぬく 不玉
禁と雨より人へ雲とれ 定陣
橋より乃杉敷他里へ舟と橋 幸良
影しきまうけの宵月乃油火 任睦
ふ挿煙乃をまきき 志衣 扇風

明きしき 倉元

つとほよよ世も輝ゆく山
秋の志事まをくす 二日月 色甚
砥傳ひ舟のらをぬつき 不玉
以てし結るるのあし 秋 色良

難後子田細川朱菴亭

みさ とも房

若楓よつとまの志とまあふ

好もゆきの夕影を秋のいきて 東也
るまぬきし言敷の下重良

とも房

小細はと柳啼しや海士と妻
わくかきし仲乃ゆきら。

三日月のすゝ房舟の舟の未し 小春
ひそけと菊の下袋つて 芳る 重江
股重し一羽織は光る 舟の光わ枝
板乃四方とめらるを せり 牧童

大州

芽生しき二葉は花の橋の美
白乃香くしけり 糸帯の色 色道
鳩生れりしけり 角搦く 玄末
人の汲らる物 籠 袴 子 小
鳥のよこ度 籠 膝のめ 厚ん 乙 別

元禄二年壬申書し

下巻

土の中をひきまき社

かみくろ

其角

小傾破りくく有く手の手
既中をくまふ仮入るまき物漢不
鳴けう止傍のむの希くして 色道
かそ家くくくまふくくくく 色 暮松
葉替とひそく小浮く市の中 盤子
山をとりゆまを風のけり 史邦
弁散乃葉こくくまふ月の香 玄末
胸けくくくまふ 黒福の朝風 大州

元禄七甲戌年

第且状

其角

春も雪も道乃くまふゆくまふ 岩翁
山くくくくくまふゆくの所 松風
独あゆむとあそとまきくつり川 彫棠
改屋をまきけ 秋は散るく 横丸
五のゆまきくくまふ 籍乃くまふくく 色道
帆張ハ合くくく 松風の夢 仙化

色道

其

秋のあくくくくく 小巻巻つまき 唯止
あけくくく 壁ハ刈は花咲く 惟吟
山川をのくくまふこのむ中 報 酒生
山川をのくくまふこのむ中 報 酒生
楓の枝とあつりくく 色道
清川よつまきまきを 色道
大乃とる川くく 色道

色道

いほよまき 鞋すん 笠くく
むくくくくく 色道
木くくくく 色道
まけくくく 色道
細くくくく 色道

如行

ふれていさよふさるわさる乃工山

蘇幻何菴をわて去哉了

越さまふ時ちつ西より 色甚

あはれや白き隣子のとらうら

炭の火をくくやまればは 移人

青の月毎とぼふは引あき 支考

けし〜と叫ぶはあふらぬ 湖水

初あ〜と暗さうはあふらぬ 舟三

類皆利てみちふひより 柘林

猿の哀やうをさる雨ふれて 三碎

ま〜と〜と〜と〜と〜と 聖函

物くはさねはれ〜と目と〜は 利雨

わすれぬやうよそれ〜と 越人

蒼天とらふら〜とせら〜と 相葉山 修岩

時直〜と次〜と〜と〜と 執事

夢想之俳諧 桃青

捧らう二月中旬旬々前 若子

こつのおくけああや〜と 杉西

雨裏む古翁ひろく泣〜と 仙西

志後き満〜と番とあゆ〜と 亀

雲ら〜と〜と〜と〜と〜と 葱代

岩乃戸〜と〜と〜と〜と 杉西

上〜と吉有明の事〜と〜と 而已

西里乃〜と〜と〜と〜と 輒筆

貞享四丁卯年

峯白

時雨〜と〜と〜と〜と〜と 菴

火煙乃〜と〜と〜と〜と〜と 色甚

松風〜と〜と〜と〜と〜と 溪石

朝霧〜と〜と〜と〜と〜と 口崎

種ひ〜と〜と〜と〜と〜と 共角

昔れ〜と〜と〜と〜と〜と 下子

後子〜と〜と〜と〜と〜と 能宮

候ニッさぬえか〜その帯
吾弟の土境よりの日代松ひりし
後々ぬ〜もろ〜勝たる交
不道白

葉柄と喰し〜時、丈夫な後信と
芭蕉

武士の大柄〜きけり〜れ
一〜りり本〜〜れおと
分ま〜〜柄にぬ紙を団えて
大〜〜古思ぬれ〜
おの葉乃〜〜て月のを
後と〜〜てゆふ〜〜
井

叙外

本〜〜と〜〜
何〜〜月
あ〜〜
えい〜
越人

懐と〜〜
蝶ねい〜
秋

芭蕉

我々の〜
す〜
招〜
板を〜
夕〜
馬〜
葛

付未ぬめいとあそび余のめと

稀あ〜
母中〜
芭蕉

夕〜
今〜
芭蕉

夕〜
日〜
芭蕉

と合年々心桶の本の中
重して花さく月とこつ 色蕉

月のあはれさしにまきつはなれ
ハツクくちま子の秋風をく 色蕉

いさくくはまきくさくさく
石のあつらふはれお 色蕉

花のあはれさしにまきつはなれ
二十余年まきくはまきつはなれ 色蕉

あはれのあつらふはれお
故まつるまきくさくさく 色蕉

うくこれ名をむけくさくさく
詩六

うくこれ名をむけくさくさく
梅橋のまきくさくさく 色蕉

色蕉

市んくはまきくさくさく

酒乃戸あつく藤のうれ 梅抱月
物息のまきくさくさく 杜園

色蕉

あつらふはれおさくさく

あつらふはれおさくさく
七夕は六日ハまきくさくさく 色蕉

色蕉

あつらふはれおさくさく

あつらふはれおさくさく
けくさくはまきくさくさく 色蕉

色蕉

木下... 東夏

如春

梅結く日影...

花の... 色...

葉の中... 葉の...

素...

其... 二里の...

角豆... 角...

子乃... 色...

素...

係... 女...

葱乃... 秋...

結... 佐圃

古... 乃...

乃...

月... 乃...

旅... 乃...

角... 乃...

秋...

新... 乃...

山... 乃...

日... 乃...

写...

乃...

雨... 乃...

自... 乃...

知... 乃...

写...

乃...

乃... 乃...

乃... 乃...

乃... 乃...

貞亨丁卯仲秋未五日

甲子口之圃にツク母こよかき
あふ人なり 或は是よりとくはる
手は寺へはかきとてはるあり
たひて他号と改め古座とてよ

離るして名をきと名のさく
字極乃きくくくくくくくく
當れ痛ハひくくくくくくく

作そのさふさふさふさふさふ
言他一そく信さるるさふさふ
くくくくくくくくくくくく
ゆるぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
らきけりくくく

曾良

藤夜早苗はけくき 會く人
あや若おくくくくくくく
交ハくくくくくくくくくく

あき四

旅人なつくとわくくくくく
あきくくくくくくくくくく

秋風

あきくくくくくくくくくく
あきくくくくくくくくくく
日の雲あお初乃くくくくく

あきかきくくくくくく

あき

あきくくくくくくくくくく
あきくくくくくくくくくく
あきくくくくくくくくくく

あきくくくくくく

主人

あきくくくくくくくくくく
あきくくくくくくくくくく
あきくくくくくくくくくく

貞亨丁卯仲秋末五日

野口之圃に母をよむを
あの人なり或はあまのこを
手は手入の母とてあまのこ
おのて他号と改め古座とてよ

離るして名をそと名のうんぬ
字極乃きんくくくくくくく
字大痛ハひくくくくくくく

作そのふふふふふふふ
音他一そく信をぬるふふふ
くくくくくくくくくくく
めるぬぬくくくくくくく
らきけりくくく

曾良

落衣早苗はけくせ
あや若れ能 あや若れく
文のくくくくくくく

あきり

新やうは又のくくく
市乃くくくくくくく
日而くくくくくくく

ね流

あま

あまのくくくくくくく
まぬくくくはくくく
何くくくのまをくくく

善伝亭

あま

風のまの南の道くくく
小あけ新を流のゆめくく
物とけく帯ハ霧は理きて

酒室

くくくくくくく
来くくくくくくく
宵の月よくくくくく

素堂

色紙

き菊此隣とあしや甘大根
冬はしつゝ菟も水意の標芭蕉
月とあふあふくうとを連て深 鹿菜

とま

うら山し浮世のわ乃山さく
舌清のこ家 細根右根 夕空
人足乃と云うそゆら春ゆり 玄米

か手巽

色友

中とふや書ゆくたのみ言新
あしゆく書乃く家か山 山店
杖持方杖とく系はまく座うて史外

世の仙とを成の白きくゆ下男と

里圃

いささ之書り世の中はのれ
あしゆく書乃く家か山 山店
大根のそく書書まふりく色友

世の仙とを成の白きくゆ下男と

松風

雲の松乃口口とて静き
日乃あふあふの赤ふ冬夜 孤屋
下着と一糸僕く打あけく 芭蕉

仲春初之夢想

即

為糸菟乃いひさし麻の冬
神乃免くこふまうに 秋 風 某申
盃のほくたあはは 月あく 芭蕉

世の物とを成りて是あり

梅う馬や馬とすたれそらの書
土とろ融くく 春 菴 崎 家
陽をよ聖の午に杖杖く 芭蕉

妻耐てささ原家や畠村
あとりりりり 杖 咲 々
越人

羽

登つて登かむ大町縣迄つて 野仁

とそ代

百多や杉の本やるはいろと子
常と杖をうらうら山公家信化
隣と心といと離の解れて去来

芭蕉

湖水くく是り新くは言のま

信よまきりていけ 取 人 文子

分るや友とていふ又とて 行六

具甫

春持し地ハ皆多かりわつしく

あつてきやうかひけいふのそ

お代の多しおき年うかたさよ

芭蕉

卵のむと母を友とて冷きしれ

香きくお家みりうたの夏 具甫

いろくれきとるう月代て 芭蕉

芭蕉

枯枝の鳥と多うく秋のそ

静くすり 常乃き 里吉書

谷山

師の構むうし拾乙本代書

あふく 常乃書 四十一 芭蕉

知足

夏草も東海まゝと云三日

まもくくやん庭の卵代也 芭蕉

李下

芭蕉野分其白と柳舞之よか

月ともみちを酒乃と 倉芭蕉

芭蕉

古池や煙といくとむあのみ

芦れあかきりりか端乃葉其角

夏校

宿多しとんあけりる人秋の書

とそ代と書し 田乃破差 芭蕉

秋の夕べは梅の香の薫る
葉の陽はぬる言れいよる色直

色直

むらりく二程家々やめり
らこめやく思ふり秋の月

是の秋月の文あり 色直

秋の夕べは梅の香の薫る

秋の夕べは梅の香の薫る

色直

如舟

やうふあやのこころの思ふ

田植ことあり 穂乃秋記 色直

色直

色直

月赤と支のあやと此の思ふ

狂ひくくくくくくくく 色直

色直

色直

色直

色直

物まきあやの思ふ別れ

つらき思ふはあやの思ふ北枝

色直

秋の夕べは梅の香の薫る

勝延

花の思ふはあやの思ふ

秋の夕べは梅の香の薫る 色直

その女

阿西やあやの思ふ

痛かき思ふはあやの思ふ 色直

色直

あやの思ふはあやの思ふ

あやの思ふはあやの思ふ 色直

乙とをなす花子とらるる朝の畑
あのかげとをなす花子とらるる朝の畑

惟妙

終はるは様うそれよみわくき
冬れつをうてく風もはくき

本因

香川

勇鷹とまきくをなすの指か
小春よりそげうこくみの虫色甚

とき

毎中より像や遠くあかり

一松志川もはくきをなすの雲ま由

本傳

春風や麦の中りあけき

う多海ゆきやあけきの名口色甚

乙別

その戸や日暮したけ一箇の酒

梅香よりそをなすの梅の月色甚

とき

月代やひさしをなす宵の宿

秋志しきうてむくをなす正秀

曲家

葉種千んむくをなす夕露

管色り 葉物乃を 色甚

珠項

いりくの若むつうをなす草

う多心く 葉乃若の葉ぬを 色甚

冊言伝とをなすの白きん

あけりる人杖実をなす高丸

角のとりをなす牛もあけの土芳

画賛

珠碩

赤んく今一はのほ機屋

かけりるくをなす公家の振袖色甚

をなすくをなすの女

裏りくをなす會をなすの女

かきくをなすの他塔

あけの白牡丹をなすの女

雪芝

水くや雨戸ははるる秋のこゑ

松と杉のしるしやぬねむり 色道

色道

三寺やちの芳客も春の雨

掃露を新しとれんの晩鐘 知足

色道

櫻木のあはれいんゝあはれいん

あはれいんをこそよつとく 秋風

心地あはれく起倒のこゑ

~~~~~

色道

くすくすのこゑをきくとまのこゑ

むしりくすくすのこゑをきくとまのこゑ 起倒

色道

松のしるしや杉のしるし

杉のしるしや杉のしるし 二つ三つ 秋風

如行、日暮の時

まねまねのこゑのこゑやとまのこゑ

古人之やりのこゑのこゑ

色道

貞草のけりし蕪田の杜のこゑ

神子の系をきくとまのこゑ 色道

まねまねのこゑをきくとまのこゑ

まねまねのこゑをきくとまのこゑ 松 桐葉

神子のけりし蕪田の杜のこゑ

神子のけりし蕪田の杜のこゑ 桐葉

福一つのみ 足けりしや 色道

湯居のけりし蕪田の杜のこゑ

まねまねのこゑをきくとまのこゑ

まねまねのこゑをきくとまのこゑ 色道

緋吹あつく 猫乃ま白  
人馬了ぬ中とら燈よまら答  
師之乃日教おら指と外

鐘つく今と終く 古寺  
旭乃山松よ雪の降あゆく

村乃出産く 華く産家  
嫁とまはせく 指とあま

暖くく湯の蒸解く 心いけ  
あつくく 湯とあま

地乃と冬く ほとく 産産か  
皆のこ代中く 湯とあま

佐くく 湯とあま  
大和の 入白く 湯とあま

屋敷の 湯とあま  
きれく 湯とあま

舟橋く 湯とあま  
右根と 細根と 湯とあま

産く 湯とあま  
く 湯とあま

枯く 湯とあま  
湯とあま

飛山や 湯とあま  
く 湯とあま

雲乃 湯とあま

芋塚返に 小男麻の角、

皇命を請へて 小作の角、

其乃右の角の角、

甲乃徳利をくむをきて、

藤乃柵をきてをきて、

板乃草履の角、

右の角、

人夢の仲よ、

藤乃角、

板乃角、

板乃角、

板乃角、

板乃角、

板乃角、

いゝととよむ子座のうら  
二町はく西は石乃てゆき

板の舟れ豆くはふく  
きさ短ふ位持ハ招杯むき

小信ふらうにかーこさうかぬ  
新舞の鈴とよまらうはめて

わく意ハ色残ともさういよう  
文目うは片よはれらまう

さつとさうてならふきり  
琴もて飛字よ入陸の根

佐わろく味のうけ  
文級うさう石とまわり

加州

成田家藏板



